

全科協ニュース

URL <http://www.jcsm.kahaku.go.jp/>

全国科学博物館協議会 ☎110-8718 東京都台東区上野公園7-20 独立行政法人国立科学博物館 Tel.5814-9863 Fax.5814-9898 平成23年11月1日発行(通巻第241号)

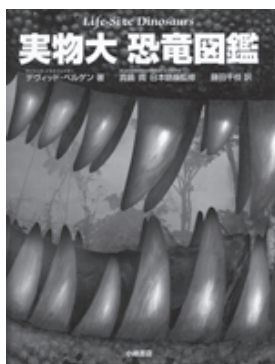
特集：読書のすすめ2011

今年も、読書の秋にちなんで本の特集を企画いたしました。今回は、新たな試みとして、ビジュアルに重きを置いた本を中心に映像作品まで範囲を広げました。選者は、全科協加盟館園の方々をはじめ、昨年に引き続き翻訳家の垂水雄二さん、作家の盛口満さんほか11名の方々です。それぞれのお立場から、プロフェッショナルとして自然科学に深くかわり、実績を挙げている皆さんから3作品ずつ、33作品となる予定でしたが、2名の方から重複して紹介された本が1冊ありましたので32作品となりました。セオドア・グレイ著『世界で一番美しい元素図鑑』です。本特集のイチオシとして特記いたします。

(本紙編集委員 畠山 泰英)

市川 雅子 (科学読物研究会会員／公共図書館司書)

科学読物研究会では、科学あそび分科会、新刊部会で活動している。公共図書館の司書としては、主に児童書の選書、児童サービスに従事している。



『**実物大 恐竜図鑑**』デヴィッド・ベルゲン著、真鍋真日本語版監修、藤田千枝訳、小峰書店、2006年

巨大な恐竜の「実物大」って本ではありえないと誰しもが思うであろう。しかし本当に「実物大」が詰まっている。恐竜の目やかぎ爪、歯などの部分の絵がそこここ。圧巻

は、開くと4ページ分にもなるティラノサウルスの口(歯)の絵だ。これを見て驚かない子どもはいない。大人でも度肝を抜かれる。科学の本には、この「驚き」がなにより大切だと思う。解説文は量的には少なめだが、大切な情報はしっかり押さえてあり、さらなる好奇心を刺激してくれる。

『**今森光彦 世界昆虫記**』今森光彦、福音館書店、1994年
この本は分厚くて手に取るとずっしりと重い。ページを開くと写真の美しさに引き込まれる。「アジア」・「中南米」・「北米とヨーロッパ」・「アフリカ」・「マダガスカルとオセアニア」の5章に、長年にわたって何度も現地を訪れて撮影された珍しい数の写真が収録されている。昆虫が棲む環境、その国の人々や文化・自然を丸ごと包み込み、その一瞬を切り取った世界。ページを開くたびに、新たな驚きや発見が待っている。添えられた簡潔な文章にも、観察者としての天賦の目と感性、被写体へのあたたかさを感じる。この本のページを閉じるとき、ふっと時空を越えた旅から帰って来たような、穏やかで不思議な感覚にとらわれる。

『**万里の長城**』加古里子文、加古里子・常嘉煌絵、福音館書店、2011年

「万里の長城」は誰もが知っていて有名だが、実は詳しいことは意外と知られていないのではないだろうか。多くの絵本・科学読み物・児童書を手がけてきた加古里子氏が、長年あため、満を持しての出版である。秦の始皇帝が築いた最初の長城から、時代とともに延伸、改修・強化工事がおこなわれ、現在に到る万里の長城の歴史と変遷を年表、豊富な絵、地図とともに丁寧に追う。「知識や科学の本では、より詳しく正確で厳選した情報を平易な表現で面白く子どもたちに伝えたい。」という加古氏のポリシーがすみずみまで満ち満ちている。この3冊に限らず、児童書には、子どもから大人までたっぷり楽しませてくれる本が多い。

奥山 清市 (伊丹市昆虫館主任学芸員)

ビジュアルが美しいだけでなく、好奇心とイマジネーションを刺激する3冊を紹介する。

『ツノゼミ ありえない虫』丸山宗利著、幻冬舎、2011年

こんな変な形をした虫が本当に存在するのだろうか？ その姿や模様には何か意味があるのか？ そもそも、そのツノは邪魔なんじゃないか？ そんな格好で飛べるのか？

えっ飛べるんだ！ と、本書の頁をめくると「？」と「！」が浮かんで消える。奇想天外かつ多様性豊かなツノゼミたちとの出逢いは、非常に刺激的だ。被写界深度合成という最新技術が可能にした鮮明で美しい標本写真とユニークな解説が、この「ありえない」ほど個性的な昆虫の魅力十二分に伝えてくれる。

“The Private Life of SPIDERS” Paul Hillyard著、Princeton University Press、2008年

昨年度、当館で開催した企画展「くも」でお世話になった一冊。全頁カラー、印刷品質も極めて高い贅沢な大型本に、クモの魅惑的で知られざる生態が余すことなく詰め込まれている。美しい生態写真を最大限に活かすレイアウトも出色であり、「ビジュアルをどのように配置するか」という点で、展示手法の参考にもなる良書である。それにしても近年、インターネットの通販サイトを使う事で、昔とは比較にならない程安く気軽に洋書を購入できる事は驚きだ。最近リーズナブルなペーパーバック版も出版されたが、こちらは写真が小さい分魅力も半減である。



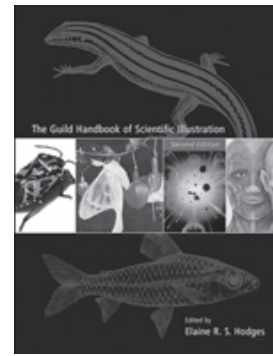
『あまやどり』写真：久保秀一、文：七尾純、偕成社、2002年

雨天の下、主人公のかたつむりが自分にはわからない「あまやどり」という言葉の意味を探す、写真絵本の傑作。かたつむりが次々と出逢う、様々な姿や方法で雨宿り中の虫たちは、生き生きとして本当に魅力的だ。雨の日に退屈している子どもたちにこの本を読み聞かせたら、傘を

もって飛び出していってしまうに違いない。雨という平凡な日常風景が、生き物たちはどんな風に雨宿りしているのだろうか？ という風に想像力を働かせる事で、とたんに魅力的でワクワクするような景色に変わる。そんな自然観察の楽しさと奥深さを、さりげなく教えてくれる素晴らしい一冊。

菊谷 詩子 (サイエンス・イラストレーター)

職業について聞かれると、「科学を説明する絵を描く仕事」と答えるようにしています。博物館では展示の説明や標本の記録としてイラストレーションを使う機会も多いと思います。サイエンス・イラストレーションに関わる3冊を以下ご紹介します。



“The Guild Handbook of Scientific Illustration, Second Edition” Edited by Elaine R. S. Hodges, Wiley, 2003年

サイエンス・イラストレーター必携の書。分子、植物・化石・動物各種、遺跡からの出土遺物など、様々な対象を描く際の手順、注意点、適した技法など、図を作成するのに必要な基本的な知識が網羅されている。魚の章を例にとると、魚の体の各部名称、制作に必要な道具、標本の設置方法（標本が乾かないようにする方法まで）、体の各部の測り方、鰭条数を数える際の注意点、鱗の配列など、こと細かく書いてある。優れた図版が多数掲載され、学ぶところが多い。

『描かれた技術 科学のかたち サイエンス・イコノロジーの世界』橋本毅彦著、東京大学出版会、2008年

普段本を読む際、図は文章の流れの中に埋まり強く主張することは少ないが、この本では図に注目して、科学や技術の説明図にまつわる29のエピソードが紹介されている。それは職人の作業風景、フィンチの嘴、地質図など多岐に渡る。最終章での「図像は単に自然を正確に描写することを目指して描かれたものではなく、著作者たちの知的な目

的と営為の中にあつて特定の意図を込めて描かれたものなのである。」という一節はサイエンス・イラストレーションの重要な側面を言い当てている。

“The Artist and the Scientists: Bringing Prehistory to Life” Peter Trusler, Patricia Vickers-Rich, Thomas H. Rich, Cambridge University Press, 2010

これは一人の画家と二人の古生物学者夫婦の30年の交流とその成果の記録である。出会いはオーストラリアのワイルドライフアート協会の展示会場。著者の一人のTomが化石哺乳類の頭骨の絵を描ける画家を探しに行き、白羽の矢を立てたのがPeter。そこから彼らの歴史が始まる。彼らが携わった12のプロジェクトが年代順に記されているのだが、面白いのはそれぞれについて科学者の視点と画家の視点の両方が記されていることである。両者の協力と綿密なコミュニケーションによって生み出された素晴らしい作品の数々が圧巻。特におすすめの一冊。

後藤 忠徳 (京都大学大学院工学研究科准教授、海洋学者)

私は海の不思議や、自然と社会の結びつきを学ぶ際にヒントとなる、イラスト満載の3冊をご紹介します。

『深海生物ファイル』北村雄一著、ネコパブリッシング、2005年

深海で暮らす奇妙な生物たちのアッ!と驚く能力が、リアルなイラストとともに綴られている。例えば赤外線スコープを持つ魚、鉄のうろこをまとう貝、自分の影を消せるイカなど。生物学的に正しい説明+想像力あふれる解説の数々は、まさに「ポケモン図鑑」である。本書の硬軟バランスは、一般向けの科学コミュニケーションを学ぶ際にも参考となる。

『はじめての海の科学』JAMSTEC Blue Earth編集委員会編、創英社・三省堂書店、2008年

イラスト・写真を多数収録した初心者向けの海の研究の解説本である。イラスト類は海洋研究者や深海潜水船パイロット経験者らが監修したものであり、実物に相当近い。また巨大地震や地球温暖化の調査活動の紹介や、研究船や水中ロボット等の解説にも現場の息吹が感じられる。説明文が若干少なめだが、本書は言わば「大人の理科資料集」である。気になるニュースの際に開いたり、専門書やインターネット等で本書の内容をもっと詳しく調べてみたいという読書スタイルをおすすめする。



『地震イツモノート』渥美公秀監修、木楽舎、2007年

防災マニュアルには「モシモ」を起点とした非現実感と堅苦しさが漂いがちだ。本書は、地震も防災も身近な「イツモ」の物事と考えて、日頃の心得を多数のイラストで説明した新タイプの防災本である。阪神・淡路大震災での被災者やボランティアの体験談が数多く紹介されているが、地震発生から復興過程までの出来事や問題点を順に読み進むにつれて、読者は自身も被災したかのように感じるであろう。時に相反する被災者間の意見も、イラストを用いて同一ページに効果的に配置されており、震災時の混乱状態も感じることができる。東日本大震災からの復興を考える上でも、将来起きうる巨大地震への備えとしても必読の書であり、モシモとイツモの違いから昨今問題の「想定外」についても思いをめぐらす機会を与えてくれる良書である。

小宮 輝之 (上野動物園 前園長)

私は子どものころから動物図鑑を愛読書としてきた図鑑おたくである。仕事柄、最近では図鑑だけでなく動物の載っている絵本や写真集にも目を通す。どこから情報を得たのか、本紙の特集「読書のすすめ2011」に絵本、映像、写真集という限定で推薦文を依頼された。



『あべ弘士の動物よもやまばなし』あべ弘士著、北海道新聞社、2010年

あべ弘士さんとは絵本作家以前から、動物園の飼育係な

かまとして、もう40年近い付き合いだ。彼の絵のモデルはすべて実物の動物たちである。初期の絵本には若き飼育係時代に飼っていた動物たちが登場する。飼育係を卒業してからは、北海道の自然の中で観察した動物が描かれている。最近では世界中を駆け巡り、出会った野生動物が出てくる。彼は動物園でも、自然の中でも、優しい目で動物に見とれている。絵筆を持つや、彼の脳裏に焼きついた動物たちが、命を吹き込まれ、キャンバスに姿をあらわす。『あべ弘士の動物よもやまばなし』には飼育係時代から現在まで出会った数えきれない動物たちがいきいきと描かれ、命の躍動感を伝えてくれる。生きた動物たちをとことん知っている彼の作品は形態的にも生態的にも種ごとの特徴がよく捉えられた生態図鑑でもある。

『出羽ノ鷹狩』米川洋プロデュース、エデュエンス・ワールド・プロダクション、2009年

映像としておすすめしたいのが、米川洋プロデュースの『出羽ノ鷹狩』である。東北出羽地方に350年以上にわたり営まれてきたクマタカによる鷹狩りを紹介した作品だ。皇族や殿様の鷹狩りはお抱えの鷹匠によりオオタカやハヤブサを使っておこなわれてきた。クマタカの鷹狩りは山形や秋田の雪深い山奥で農民の鷹使いにより継承されてきた。松原秀俊さんは最後の農民鷹使いであり、これまで伝承されてきた民族技術は途絶える寸前である。クマタカの捕獲に環境省から許可が下りず、後継のクマタカを育てることができないのだ。鳥獣保護法を順守するか、文化財保護法を優先すべきか。自然も民族文化も守るため、もっと柔軟な法の運用ができないものだろうか、考えさせられる作品である。

『ほんのおおきき動物園』小宮輝之監修、福田豊写真、学研、2008年

今回の推薦ではいちばん得意とする図鑑は依頼されなかったが、図鑑的要素もあり、絵本でもあり、写真集ともいえるので選んでみた。『もっと!ほんのおおきき動物園』2009年、『ほんのおおきき水族館』2010年、『ほんのおおきき・なかよし動物園』2011年と続巻が出て、来年は東北の動物園・水族館を応援するシリーズ第5巻も出版される。このシリーズは英、仏、スウェーデン、オランダ、スペイン語でも出版された。アメリカではニューヨーク・タイムズに書評が載り、<The Parents' Choice Awards>の金賞まで受賞した。さらにロシア語、中国語、韓国語版を制作中で、『実物大動物図鑑』として世界中の子どもたちに届けら

れることとなった。上野動物園の書庫閲覧室には各国語版が揃えられ、スウェーデン語やオランダ語、韓国語など難解な動物名を調べる辞書としても重宝されている。自分の監修した本をおすすめするのは気が引けたのだが、このような事情ということで、お許し願いたい。

高田 高史 (神奈川県立川崎図書館司書)

私の勤める神奈川県立川崎図書館は、科学・技術系を専門的に扱う全国的にも珍しい公共図書館である。自然と人のつながりをイメージしながら、科学系博物館での展示や活動にも参考になりそうな3冊を選んできた。

『日本の森と木の職人』西川栄名著、ダイヤモンド・ビッグ社、2007年

雪深い山中で天然の秋田スギは樹齢300年、高さ50メートルにも育つ。広葉樹も生える森林では、スギも曲がったりコブができたり素直ではないが、人工林の材木と比べると明らかに木目が詰まっている。この材木を地元の大館の職人が、曲げワッパという弁当箱に加工していく…。本書ではほかに、御蔵島の島桑と琵琶など、9つの例を取り上げている。自然があつての森林、そして木材の特色や地域性を活かして工芸品になってゆく一連の流れが見えてくる。



『海のプロフェッショナル 海洋学への招待状』窪川かおる編・女性海洋研究者チーム著、東海大学出版会、2010年

この本を執筆しているのはすべて女性。探査船ちきゅうの乗組員から、海洋環境の研究者、水族館の学芸員、水産大学の学生まで、さまざまな海洋学に携わる人を「学ぶ」「進学する」「仕事にする」の3部構成で紹介している。さらに彼女らが現場で働く姿を通して、海的环境や生命、研究の意義などが理解できる内容にもなっている。一日のタイムスケジュール、年間のスケジュールも載っていて、仕事の大変さと同時に楽しさも伝わってくる。もちろん男性にも読んでいただきたい。

『写真で見る自然環境再生』認定NPO法人自然環境復元協会編、オーム社、2011年

横浜のみなとみらい地区に近い人口堤防では、ヨシを植生してビオトープにする活動が進められている。横浜の郊外、恩田の谷戸では、小川を復元しホテルやホトケノドジョウが生育できるような維持活動が行われている。このような全国の自然再生への取り組みが21例、多くの写真を交えて説明されている。いずれも自然本来の姿を知り、復元のあり方を考え、近隣住民がどのように関わっているのかが、とてもわかりやすい。

垂水 雄二 (翻訳家・科学ジャーナリスト)



『世界で一番美しい元素図鑑』セオドア・グレイ著、ニック・マン写真、若林文高監修、武井摩利訳、創元社、2010年

現代的な図鑑の傑作。周期律表に載っているすべての元素を原子番号順に、原則として見開き2頁で解説(ただし、アルミニウム、鉄、金、鉛など利用度の高い8元素は4頁、101~118番以降はまとめて全4頁)。左側の頁には、単体元素の美しい写真(このコレクション自体が驚異的)が配され、右側の頁で、原子量や結晶構造といった基本データのほかに、当該元素を用いた製品や技術の実例が、これまたみごとに写真付きで示されている。元素名の由来や、発見にまつわる逸話もウィットに富んだ文章で綴られ、元素に対する著者の情熱が行間から溢れ出ている。無機的な元素の世界に豊かな広がりがあることを教えてくれるみごとに1冊。

『アラマタ生物事典』荒俣宏監修、講談社、2011年

現代の博物学者荒俣が、博物学の古き伝統に立ち戻り、有用性という視点のみから身近な生物を取り上げ、それをアイウエオ順で記載するという快挙(暴挙?)を成し遂げたのが本書である。シカ、ジキタリス、シジミ、磁性細菌といったふうに、まるで異なる世界の生物が並ぶところが面白

い。各項目は複数の執筆者によって分担され、子供向けに総ルビで書かれているにもかかわらず、内容は大人が読んでも耳新しい。古典的な形式をとりながら最新の知見が取り込まれている証左は、巻頭の「生命の樹」という図表だ。この系統分類表は非常に新しく、古い生物学の教育を受けた人が見れば、きっと驚くにちがいない。

『乾燥標本収蔵1号室：大英自然史博物館、迷宮への招待』リチャード・フォーティ著、渡辺政隆・野中香方子訳、NHK出版、2011年

合計32頁にわたるカラー図版が収められているとはいえ、この本をビジュアル本と言うことはできない。しかし、著者が長年勤めた大英自然史博物館の舞台裏を語るこの物語は、ビジュアルな展示の意味を深く考えさせてくれるという意味で、博物館関係者必読の名著である。

土佐 誠 (仙台市天文台 台長)

宇宙をビジュアルに扱った本・DVDは数多く出版されていますが、天文学とその歴史を体系的に学べる3点を選びました。



『最新天文百科—宇宙・惑星・生命をつなぐサイエンス』マイケル・シーズ、ダナ・バックマン著、有本信雄監訳、丸善、2010年

現代天文学をビジュアルで紹介する本ですが、副題が本書の意図をよく表しています。科学的にしっかりした説明と教育的配慮が行き届いているので、現代天文学の標準的な教科書としても適しています。この本の始めに、宇宙の構造がスケールとともにどのように変わるかイラストで示されています。宇宙の定番ですが、これを動画によって効果的に視覚化したものが次のブルーレイディスクです。

“Cosmic Voyage & Density in Space” [DVD/Blu-ray], Imax, 2008年

始めに縮尺を連続的に拡大して地球から超銀河団に至

るマクロな宇宙の構造が示され、次いで微生物からクォークに至るミクロの宇宙の構造が示されます。後半はビッグバンから地球誕生・人類の出現に至る宇宙の進化が多彩な映像によって展開し、全体で宇宙の空間と時間の広がりや学ぶことができます。通常のDVDもありますが、この作品の美しく精細な映像はハイビジョンならではのもので、ブルーレイディスクがおすすめです。

これらは現代の宇宙像を紹介するものですが、そこに至る天文学の歴史も興味深く宇宙の理解に役立つものです。そのような天文学の通史をビジュアルに扱ったものが次の一冊です。

『ビジュアル版 天文学の歴史』ヘザー・クーパー、ナイジェル・ヘンベスト著、日暮雅通訳、東洋書林、2008年

天文学史の見どころは、現代の視点からは素朴に見えても、その時代の宇宙像に変革を迫り、人々の創造性を刺激した「大発見」です。もし、その時代の宇宙に対する疑問や問題意識を理解し共有することができれば、「大発見」を追体験し大いに創造的刺激を受けることができます。天文学史を学ぶ醍醐味です。そのためには想像力が必要ですが、本書のイラストや写真が読者の想像力を刺激してくれます。

福井 恵樹 (元福音館書店編集者)

子どもたちを対象にした月刊「たくさんのふしぎ」をご存知でしょうか。テーマはあらゆるジャンルに及んでいます。子どもたちに身近な動・植物、食べ物はもちろん、宇宙、数学、哲学、文化人類学に到るまでテーマは尽きることはありません。創刊以来、すでに320号を越えています。ハードカバーになっていまでも手に入るものなかから3冊を選びました。

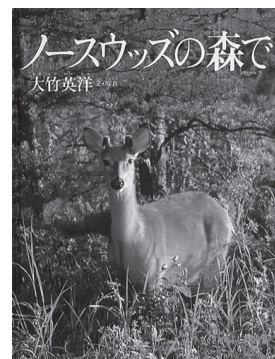
『落ち葉』平山和子文と絵／平山英三構成と写真、福音館書店、2005年

20数年前の初冬、黒姫山の麓の林で、平山和子さんはわずかに緑色を留めた1枚の落ち葉を見つけました。なんとかこの美しさを残しておきたいと平山さんはそれを描き始めました。それ以来、平山さんは黒姫に居を据え、落ち葉を原寸大の水彩で描きつづけています。落ち葉の形・意匠の美しさ、おもしろさに魅せられ、それを伝えたいという平山和子さんはさながら落ち葉の伝道師です。この本に収められた50数点の落ち葉の絵を見ると、落ち葉の美に魅了され、あらためて地面に散り敷いている落ち葉を手にとりたく

なること必定です。

『春の妖精たち スプリング・エフェメラル』奥山多恵子文・絵、福音館書店、2010年

早春の落葉広葉樹林にひっそりと可憐な花を咲かせて、地上での短い命を終え、すっかり姿を消してしまう野草。「春のはかない命」を意味するスプリング・エフェメラルという名で呼ばれる植物群は、その生態はまだあまり知られていません。秋田県の自宅の裏山で、いつも親しく接してきた「春の妖精たち」の丹念、克明なスケッチはもちろん、実際の栽培、観察に基づいた想像力で描かれた地下での生活ぶりは科学と芸術の見事な融合で説得力があります。



『ノースウッズの森で』大竹英洋文・写真、福音館書店、2011年

北アメリカ北部にひろがる広大な森と湖の世界「ノースウッズ」を、数十キロの荷物を携え、夏はカヌーを操り、冬はソリを曳きながら10数年にわたって撮影をつづける写真家・大竹英洋さんの処女作。冬は零下40度にもなるという厳しい自然を撮りながらも、画面はいつも静かで、暖かさに満ちています。自然をよく知ろうと思ったら「じっと待つ」、対象を追い求めるだけではないスタンスの取り方が画面の静謐さを生み出しているのでしょう。

盛口 満 (作家、沖縄大学人文学部准教授)

長年、理科教員として、多くの中高校生や大学生と接してきた。最近思うのは、さまざまな身近にあった「もの」や「こと」がケータイとコンビニに、収れんしてしまったということ。一方で、見たこともないような「もの」や「こと」に振り回される現実も同時にある。そんな世界で、若者に何をどう伝えるか、いつも迷う。

『地球の食卓 世界24か国の家族のごはん』ピーター・メンツェル＋フェイス・ダルージオ、TOTO出版、2006年

世界24か国をまわって、各地の家族を、その一週間分の全食糧とともに映した写真集。「一週間でこれだけ?」「一

週間でこんなに?」……食卓というもっとも身近な風景から、自分たちの暮らしを問い直してみたくなる本。

『世界で一番美しい元素図鑑』セオドア・グレイ著、創元社、2010年

福島原発事故を伝える報道を前にして、「ウランって何? 目に見えないもの? 気体?」と、うちのカミさんが言った。ウランやら放射能やらが、ごちゃ混ぜになっている。おそらく、これが一般の多くの人の認識だと直感した。かく言う自分自身、ウランの実物なぞ、見たことがない。原発を考える上で、まずウランという「もの」がどんなものかということ視覚的に伝えてくれるものはないだろうかと思ひ、手に取ったのがこの本。



『ココが家だ ベン・シャーンの第五福竜丸』絵ベン・シャーン 文アーサー・ピナード、集英社、2006年

ベン・シャーンの第五福竜丸事件を描いた連作をもとに、日本在住の詩人、アーサー・ピナードが構成し文をつけた絵本。1954年3月1日、第五福竜丸と23人の乗組員は水爆実験の死の灰を浴びた。その翌日の3月2日、突如として国会に保守三党から原子炉建造予算が提出され、日本の原発開発がスタートする。すなわち、日本の原発の原点はこの事件にある。「この物語が忘れられるのをじっと待っている人たちがいる」と本(第1刷)の帯にあるのだが、私たちはその人たちの思い通りになってはいないだろうか?

山下 治子 (「ミュゼ」編集長)

『「理科」で歴史を読みなおす』伊達宗行著、ちくま新書、2010年

日本の科学系ミュージアムグッズと海外のそれを比べていくと、どうしても欧米のグッズに軍配があがってしまう。館の規模や経営方法などの違いもあるが、それだけでなく、どうもグッズ開発の背景にある考え方の違いが感じられるのだ。1+1=2を教えようとする日本のグッズに対して、1+1=3か、1か、それとも2かなという戸惑いや発見

の楽しさをコンセプトに組み込み済みなのだ。だから、デザインも良い。なぜだろう。

本書の「アルスの世界—科学と芸術の原点」の章が、その問いに明快に答えてくれた。すなわち、西欧ではギリシャ文化のころから長い年月をかけて、自然哲学(ナッテューラ:人の手が加わらないもの)と技芸(アルス:人間の行為に関するものすべて)とわかれて知識がとらえられていたが、中世、ルネサンス、産業革命などを経て、アルスの中から「サイエンス」が成立し成立していく。日本はそうした後の19世紀後半にそれらを別個のものとして受け入れ、サイエンスを適訳ではない「科学」とし、哲学の部分に欠落させたことにも問題があったと指摘する。物性物理学を専門とする著者が、「理科」から縄文文化、古代文化、数遊びなどに斬り込んでくれる。理科の思考力で歴史を解析する「理科力」がつく。



『生きてる 生きてゆく ビッグパレットふくしま避難所記』ビッグパレットふくしま避難所記刊行委員会、2011年

福島県郡山市にあるコンベンション施設「ビッグパレットふくしま」は、東日本大震災による原発事故で避難した福島県富岡町と川内村の人々など一時は2500人超であふれる最大級の避難所となった。そこでの5か月の記録を「被災地からの発信」として出版した。段ボールで仕切った部屋での暮らし、一時帰宅、子どもたち、ふるさとを想う夏祭りのようすが哀切のなかにも喜びと希望を見いだす人々の写真と「つぶやき」で構成される。筆者も福島県出身であることから刊行委員として編集に関わった。ぜひ一見を。

『西洋絵画の巨匠たち DVD BOOK』解説者 ティム・マールウ/千足伸行 宝島社

静かな美術館でじっと絵を見るのはどうもという方も、家庭で、高画質な絵で、しかも美術評論家のわかりやすい解説つきならどうだろう。フェルメール、レンブラント、ブリューゲル、ルーベンスの72作品を見ることができる。秋の夜長にでもどうぞ。